目　次

アフリカレポート
No.31　2000

巻頭言　地球上の多様な個別性を：文化人類学からの視点　●福井勝義　1

ジンバブウェ2000年総選挙
——破滅か再生か　●平野克己　2

シエラレオネにおける
国連部隊襲撃拘束事件　●落合雄彦　7

ルワンダの復興と新農村政策
——土地法改革と集村化をめぐって　●武内進一　11

ウガンダにおける難民政策と
UNHCR
——地元定住政策から「自立への戦略」へ　●清水康子　15

ゴリラの大量虐殺とその背景
——コンゴ民主共和国の内戦が脅かす野生動物と人間との共存　●山極寿一　19

南アフリカの路商と移民の参入
——ジョハネスバーグの事例　●吉田栄一　24

ブルキナファソの農村開発における現地NGOと地方行政
——ナームグループ全国連合（FNGN）を事例として　●竹下麦穂　29

アフリカの農村小口金融における課題と取組み
——ジンバブエの貯蓄クラブを事例として　●粟野晴子　33

ケニア小農部門紅茶産業における生産者組合運動の興隆について　●大倉三和　37

ケニア・ルオの居住形態の変遷　●椎野若菜　41

西アフリカの農業の起源と考古学の現状　●竹沢尚一郎　46

資料紹介　50

カット：南アフリカの路商は白人富裕層中心の郊外都市にも進出している（南アフリカ・ローズバンク）（吉田栄一撮影）

本誌に掲載されている論文などの内容や意見は，外部からの投稿を含め，執筆者個人に属し，日本貿易振興会あるいはアジア経済研究所の公式見解を示すものではありません。

編集後記

●隣の廃校は夏の盛りにすっかり解体されてしまった。ショベルカーの大きいやつが何台か校舎の周りに群がり，ショベルの代わりに背丈ほどもある鉄バサミをつけて，壁をぼりぼり砕いたり叩き崩したりして，校舎は数日で瓦礫の山に変わった。崩した瓦礫はさらに叩かれ嚙られして，コンクリが細かく砕かれ，鉄骨と選り分けられた。コンクリはコンクリで専用のトラックへ，鉄骨は鉄骨で扱いやすい大きさに纏められて，これまた専用のトラックへ。いつともなく瓦礫はすっかりどこかへ運び去られてしまい，後には，びょうびょうと海風が吹き渡る，見通しのよい空き地が残った。破壊や瓦礫の恐ろしさとか，今はない建物を思い出す時の痛ましさとか，それから爽快さとか。建物を壊すということは，なんともいろいろな比喩に満ちているものです。

（佐藤）

●アジ研が出している『ワールド・トレンド』の2001年１月号，つまり21世紀第１号でアフリカ特集をやりたいと思っている。20世紀にアフリカを舞台として変化したものを取り上げる小特集である。

●最初の発想は人類学だった。19世紀ダーウィニズムが実証研究の場をアフリカに発見したことで，いまわれわれは人類の発祥について相当の知識を持つに至った。本年５月の日本アフリカ学会学術大会，その特別講演「ヒトと文化の起源を探る」で京都大学の石田英実先生は「結局何も分かっていない」として話を締め括られたのだが，逆にいえば人類発祥の概念図を描いてその空白部を指し示せるところまで，20世紀の百年間でやってきた。

●単純な設計の脊椎動物が進化して，われわれだけが背骨を重力に対して直立させ歩き始めた。舞台はアフリカ大地溝帯である。背骨が直立したのでその先にある脳を重くすることができた。大きな脳を持つサルは存在しないが，サル並の脳を持つ原始人はいる。アフリカでしか発見されない彼らの化石が，われわれに類的存在としての自己認識を与えてくれた。

●進化とは生体設計の変化であり，すなわちDNAの書き換えである。それを促進するのが有性生殖で，両親遺伝子のリシャッフルだ。DNAは常に壊され，また新たに再生される。個体はその運動を伝えていくにすぎない。したがって有性生殖生物は必ず死ななければならない。次なる変化を生み出すために。

●アジ研隣の校舎が解体されていった一方で，流行りのアウトレットモールが完成間近，巨大スーパーマーケットの建設も着々と進んでいる。壊しては造るを繰り返して先の見えない変身を続ける世界。

本誌の編集委員は以下の７名である。

平野克己，佐藤　章，望月克哉，高根　務，武内進一，津田みわ，鳥谷尾克男

（平野記）

アフリカレポート　No.31　2000年９月30日発行

●編集・発行　日本貿易振興会 アジア経済研究所

●編集　地域研究第２部

●発行　研究支援部

千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2　〒261-8545　TEL 043-299-9735　FAX 043-299-9736